昭和51年9月14日国鉄首都特別扱承認新聞紙第422号

週刊 うたごえ新聞

1/2・9 (1978年) NO.690

THE SINGING VOICE OF JAPAN
日本のうたごえ全国協議会機関紙
発行 東京都新宿区西大久保3－67
☎03 (209) 0638～9 うたごえ新聞社
振替口座 東京2－5631 昭和34年1月31日
第三種郵便物認可 毎週月曜日発行
1部60円 (〒15円)・月250円 (〒75円)

早春

新春家庭ほうもん

家族みんな合唱団

中田さん一家(東京)のお正月

新春に家族そろって、オメデトウーみんなが一番いい顔になる日。オメデトウのひびきには音楽が感じられるような……。いつでもそんなひびき、ハーモニーのある家庭があったらどんなにいいでしょう。

汗のにおいのするお父さんがお茶をすすり、苦い風邪薬をいやがる娘に飲ませようと苦心するお母さん。その横で末娘がもみじのような手でせっせと折り紙――この人たちが音楽のとびらを開くと、どこにでもあるようなこの家に春の風が舞って家中がうたい始めるのです。

中田さん一家(東京都・世田谷区)。徳郎(42・自営業)、フミ子(35)夫妻に三人の子どもたちも、音楽と共に育ち生活しているような家族です。

よその奥さんを連れてきてはピアノを弾いてうたうフミ子さん。そのフミ子さんの「ときりこ」の歌を、小さい頃みよろみまねでうたって、今では親より上手にピアノを弾く一子(いちこ)ちゃん(13)。風邪をひいちゃってつまらなさそうな顔をしていても立子(りつこ)ちゃん(9)は歌をうたえば元気ハツラツ。末娘の民和(みわ)ちゃん(3)は、ピアノをいじっている写真を見せられて、「オテテ小サイカラ、ピアノヒカレナイノ」と、カメラの前でニッコリ、ポーズをとりました。

うたう声がものすごく大きいという徳郎さんは、「うちはみんな、生活の中に歌があるんだよ」と、音楽談議をひとくさり。中央合唱団二十六期研究生だったそうです。ちなみにフミ子さんは同四十六期。

フミ子さんと三人の子どもたちは親子ぱとコーラスに所属。毎日、家でレッスンしているようなものです。東京のうたごえ合唱発表会では、フミ子さんと民和ちゃんのかけあいのうたごえ(「すてきな料理を」)を聴いた読者もいるのでは。

(石川記者)

▲家族そろうとすぐ合唱になる中田さん一家は…

港町にとぶ若者衆

石巻うたの村

【石巻発】私(仙台支局・宮森通信員)は「斉太郎節」に出てくる石巻に来ています。漁業と製紙工場の町・石巻。

この町でもう三年間も毎月うたごえ喫茶を開いている「石巻うたの村」の仲間を訪ねました。三年前、労音のうたう会をやっていたのが始まりだそうです。

任務分担も無理なく自分の生活に合わせてうたごえ喫茶を開いてきた、という。

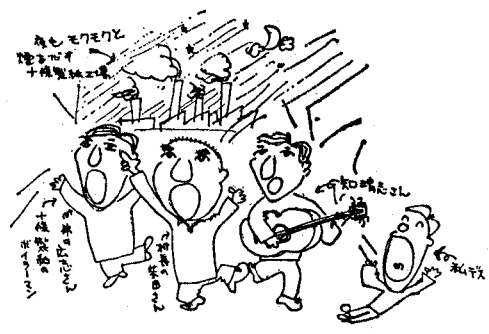
この「村」には自分たちのオリジナルが多いこと、それを〝キャラバングループ〟などをつくって広めているのが特長です。

村長は柴田光一さん、「網代大漁節」を創った矢口清志さん、兄弟の矢口広志さんらが中心メンバー。

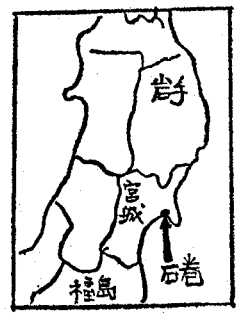
「別に企画やレッスンもしてないしね……」といいますが、毎回四十名を越える人たちが集まってきます。子どもや夫婦連れの人も多いとかで「誰でも参加でき、誰でもうたえる」うたごえ喫茶。演奏希望も大歓迎、その条件はたった一つ「みんなでうたえる歌」だそうです。

ここのうたごえ喫茶が三年もつづいて、石巻周辺の地域にんどん広がっている石巻の光景です。

新しい年に、健康な歌がども影響が現われています。女川町、矢本町、雄勝町といった所でもうたう会が始まりました。



写真下は「石巻うたの村」の若者たち。右のマンガは宮森通信員のスケッチより。



宮森通信員特派(宮城県)

新歌